
I think this way

きゃっつびー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I t h i n k t h i s w a y

【コード】

N 2 4 6 6 R

【作者名】

きゃっつびー

【あらすじ】

日々の思考と後悔と、出来ることなら幸福を、書ければいいと願います。

今日という日

何も無く、何もせず、ただ流れていく時間。今日という日。

そんな時間を過ごしているとき、ふと、背中を撫ぜる冷やかな感触。

漠然とした不安、今日という日のちいさな後悔、自己嫌悪。

何か特別なものを求めているわけではないけれど、

確固たるアイデンティティとともに、毎日を生きていたい。

そう出来れば、きっと自分も幸せになれると、

何の根拠もなく何の保証もなくそう信じながら、

それだけをいつも望んでいる。

幸せな明日を。

必要性

明確な必要性も、意味も持ち合わせていない自分。

それに対して嫌悪は無い。今のところは仕方の無いことだと思っている。

そもそも人間は必要性があつてここにいてるのではないのだ。

この世界に生まれたのは、きっとみんな無意識であるはずだから。

意味も必要性も、元々備わっていない。

それでも生きている。川に沈んだ石ころが、水面みなも越しに見上げる太陽の光のような、そんな透明かつ穏やかでやるせない、そんな感覚の中で。

理由（前書を）

理由

幸せになれない理由。今現在なれていない理由。

それはきつと、今までの行動理由が「幸せを求めていたから」ではなかったから。

不幸になりたくなかっただけ、不幸から逃げていただけ。

逃げて、ただ誰かに言われたとおりに無難な選択肢を選んできただけ。

その結果、生きているだけの存在となつて、自分はただ存在している。

その苦悩は、罰として受け入れよう。

そして次こそは間違わないように。

今はまだ、やり直すことが出来るから。

筋書き

今日、仕事で小学校に。

見せてもらったのは、大人たちの書いた筋書き。

表面上はホタルの復活活動、本当の所は情緒教育。

別の専門家に聞いた。子供達に育てられ、川に放流されるホタルの生存率は、実質1%。

100匹に1匹。

後はみんな死んじやいます。

今年は8万匹放流したそうです。

夏になって、800匹のホタルが飛んで、それを見た子供達は喜ぶでしょうね。

でもまあ、そんなものかな。

でもやっぱり、どうしても、苦笑い。

麻痺

いつも自分は考えています。

通勤時間に、仕事の合間に、家ではずっと。

それは自分の過去であったり、現在であったり、未来であったり、
ずっと考えています。

彼は言いました。

「いずれ麻痺してくる」と。

知っていたけれど、

そんな言葉は聴きたくなかった。

考える余裕すらいずれ無くなる、なんて、

残酷です。無慈悲です。救いようがありません。

「人間は考える葦である」

考えない人間は、ただの葦である。

そんなのは、

「俺は嫌だね」

可能性

無限の可能性、という言葉をもっとよく聞く。

「無限の可能性」、それはきっと希望という意味合いよりも、戒めの意味合いが強い。

その中には、ハッピーエンドの可能性と共に、バッドエンドの可能性が確実に内包されているのだから。

王子様が助けに来ない「白雪姫」、魔法使いのいない「シンデレラ」。

そんな物語を、まるで知らない素振りで奴等は謳う。

僕らの未来に内包された、「無限の可能性」を。

只々、それは素晴らしい事のように。

叶わない不変性

例えば、

川に流れる椿の花の、何ともいえない残酷めいた哀しさとか、

晴れた青空の日、団地にはためいている色とりどり洗濯物を見たときの平和感とか、

雨上がりの、しっとりとした森に薫る草木の匂いとか、

冬の夜の、冷たくて鋭い研ぎ澄まされた空気とか、

春風の切なさとか、

そういったものを最近よく感じるようになって、

巡る季節、その回転の中で、確実に自分が変わっていくことを、そのことで実感して。

大人になるのは嫌だなあ。

防衛本能

考える、という行為は、防衛本能に近いものだ、僕は思っている。考えている、ということは、考えなくてはいけない状況にいる、ということなのだ、とも。

つまりは白血球みたいなものだ。精神には入り込んだ不安という不要素を排除するために働く。過剰になればアレルギー反応を起こす。

つまり、考え過ぎるな、というのは、過剰反応をやめろ、ということなのだろう。それは正しい。しかし過剰か過剰でないかという判断基準は、極めて難しいことだ。正しく正確にそれが出来る人間は、すべからく天才であると僕は思う。白血球はコントロール出来ない。

つまり無理難題。考え過ぎるな、という要求は極めて高度な要求なのだ。

藤の花

五月に藤の花を見に行つて、

それを見ていたら、不意に、自分がまだ保育園だった頃のことを思い出した。

藤の花を、葡萄の花だと思っていたこと。熊蜂に追いかけて泣いたこと（あの頃は熊蜂とスズメバチがごつちやになつて、熊蜂に刺されたら死ぬと思つてたこと）。

そんな日もあつたなあと思ひながら、同時にその感情にこそ、「もう大人なんだから」と、言われているようです。

「だから、そろそろ大人らしくなりなさい」とも。

まあ、そのうちに。

始まりの夕景

雨上がりの夕焼けが一瞬、信じられないほどの赤色を空いっぱい
に広げ、消えていく。

梅雨もそろそろ終わり。まだ咲いているアジサイの花も、そう遠
くない日に姿を消していくだろう。

また、あの夏が来る。もうすぐだ。

後悔と絶望と始まりの季節。

死ぬ気力も無かった自殺志願者が、少しだけ元気を取り戻し、快
活に血を流す様な、人生に絶望した人格破綻者が、忘れていた憎し
みを思い出し、剣呑な表情を浮かべ再び立ち上がる様な、そんな季
節。

3年前に見たのは、落ちぶれた自分を素知らぬ顔でぎらぎらと照
らす太陽。

世界と自分との無関係さに、自嘲気味な表情で笑い、生き長らえ
た。

夏が来るたびに思い出す。これからもきつと、ずっと。

思い出は無残なものだけれど、悪い季節ではない。

自分は夏が好きだ。

自殺するなら、夏がいい。

今年は向日葵園に行こうと思う。

ここ数年、見ることの無かった向日葵の花を思う存分見たい。
そうして、また始められればいいと思う。

本当のホントウは、出来ることなら、生きること。

鞆

今日読み終えた本が3冊、
今日新しく買った本が4冊、
まだ読み終えてない本が1冊。

弁当箱、携帯電話、i pod、財布、日焼け止めクリーム、メモ帳とペン。

それと、今日買った梨が一つ。

結構重い。

でも持ち歩く。

捨てられないのは何故か。

何故だろう。

捨ててしまえば、きっと軽くなる。

だから捨てない。

価値あるものはいつだって、重いものだ。

軽い人生なんて、つまらない。

人生には、重みが無ければつまらない。

きっとそういうことだ。

answer

独りにもなれないのに、「死にたい」なんて言うべきじゃない、
と言われた。

他でもない自分自身に。

知っていること。

過去に、死にたいと思ったことが確かにあった、ということ。
過去に、楽しいと思ったことが確かにあった、ということ。

「生きていれば、何かきつと良いことがある」という言葉は、既
に使い古された言葉だが、不正解だ。

そんなものは、自分次第のことだから。

それぐらい解らなければ、生きる資格はない。

そう自分に言い聞かしている。

いつかまた、死にたいと思うときが来る、ということも知ってい
る。

人間のおよそ半数は、許容出来そうにない。

世界の八割方は、気に入らないもので構成されている。

いつか、何処かの誰かに殺されるかもしれない可能性を、僕は
いつだって自覚している。

それでもまだここにいる。

「どうして貴方は生きているの？」

「それが、すべての答えだからだ」

「生きていて良かった」、なんていう戯言を最後の最後に言った
めに、僕たちは生きているのかも知れない。

生活

失敗の無い人生は無い。失敗してこそ得られるものもある。それは分かっているつもりだ。でも、こつとも失敗続きの人生では、どうも気が滅入ってしまう。

そして何が一番の問題かというと、人生というものはどれだけが滅入るうが、嫌だ嫌だと叫ぼうが、そう簡単には辞められないことだ。

人生という仕事に、休日はない。

他人から見れば、きつとなんてことは無い日常の中で、僕はいつだって慎重に、息を吐いている。

無意識に生きられない自分は、何か間違っているようにも思う。でも今は、それで精一杯だから。

また明日。

年は暮れる

時間の流れはいつだって、止まることもなく一定。
僕がどれだけ失敗して、落胆して、傷を受けても、終わらない。
連続する一秒は流れ続ける。

年は暮れる。

僕が何かを成したとしても、或いは何もしなかったとしても、変わらずに。

それが良いことなのか悪いことなのか、そう誰かに聞かれたなら、僕は「良いことだよ」と言うことにする。

曖昧な答えは既に聞き飽きたし、それに僕は、そうであったほうが良い、と思うから。

それこそが、この一年に置ける僕の進歩だろう。

植物は、どんなに枝を切られようと、葉を落とされようと、空に向かって伸びることをやめない。

誰を恨むことも、憎むこともなく、粛々と。

現実的でなくとも、僕はそうあるように日々努めていきたい。
意味などなくとも、理想のために生きていたい。

孤独なんて何処にもない

もしも近所で事件が起きていたとして、今警察に「どうしてこんな時間に外を歩いていたんだ」と聞かれたら、僕はこう答えるだろう。

「月が綺麗だったのだから」
理由なんてそれで十分だと思う。

冬の夜は寒いけれど、散歩するには都合がいい。夏なんかは、歩いていると蜘蛛の糸が張り付いてきたりするし、春や秋は過ごしやすい分、夜とはいえ人が意外と多い。

だから冬が一番いい。
買ったばかりのダウンジャケットを着て歩く今日の夜は、中々いい夜だった。

音楽を聴きながら空を見上げて、これからの事を考えた。

細かいことをここに書くには、少々時間が足りないけれど、それだけたくさんの事を考えた。

一人で、誰もいない海の見える道を歩きながら。信号機の光に合わせて、点滅する自分の影を眺めながら。

月を見上げながら。

誰もいない。

一人だけ、自分がいる。

悪いことではない。

必要なこと。

孤独なんて何処にもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2466r/>

I think this way

2012年1月11日01時00分発行